

プロジェクト進捗状況6 （2021.8.23）

●インタビューの趣旨

介護用品を3Dプリンタで商品化できるレベルまで持ってゆくために、情報を収集していたところ前回のインタビューでお世話になった、横浜市泥亀地域ケアプラザ様より3Dプリンタで自助具などを製作・開発されている横浜市総合リハビリテーション様を紹介頂き、インタビューさせて頂くことになりました。

●インタビュー対象

横浜市総合リハビリテーションセンター（YRS）
地域リハビリテーション部 研究開発課 畠中様

●インタビュー詳細

リハビリテーションセンターでは、障害のある方の支援をメインの業務しているので、介護一般で使用されている商品ではなく自助具や車椅子などを見学させていただきました。

1. 介護用品には規定があるのか？

テーマとしている杖は、最もポピュラーであるT杖と4点杖は規定が異なる。
4点杖の方がT杖に比べて、使用者の身体機能レベルは低下しているかたが使用されるのでT杖よりも安全性が高くなければならない。
ただ、強制力のある規定はあまりないと仰っていた。

次に、介護用ベットや車椅子などの大型で電氣的なものに関しては、一般的な介護用品に比べ動力があるので、安全性などの特に厳しい規定をクリアしていなければならない。

3Dプリンタならではの設計の柔軟性を生かしたデザイン性に富んだものを製作しようと考えていたが、今回のインタビューを踏まえて、まず安全性を重視しその上で多少のデザインを加えることにする。

2.改善の余地がある商品は？

・電気スイッチや介護用ベットのボタン

障害のある方も介護を要する方も、電気スイッチをうまく押せなかったり、介護ベットの誤操作が起きてしまうことを防止するために、後付けでスイッチを大きくすることで押しやすくなり、常に使用するボタンに取り付けることで寝たきりの状態でも操作する事が可能となるのではないかと考えられる。

●製作にあたって重視すべき点

- ・リスクマネジメントを考える
- ・利用者か介護者のどちらが取り付けを行うのか決めておく
- ・規格の有無の確認
- ・天候・気温・強度・耐久性

●3Dプリンタの商品例

研究開発課では、3Dプリンタで自助具などを製作されており、いくつか紹介いただきました。



障害や事故で手が思うように使う事ができない方が、野菜を切るときに使用する商品。

抑える面積が大きいので、体重を乗せることで野菜を安定して切ることが可能となっている。そして周りの透明なゴムチューブは滑り止めとして用いられている。



身体に障害のあるお子さんが、遊ぶための商品。

箱をひっくり返すことで、おはじきが落ちてくるので、気軽に遊ぶことが可能となっている。

障害のある方は、健常者用のおもちゃでは遊ぶことができない事があり、専用のおもちゃ自体も豊富に存在していないため3Dプリンタで作成したと仰っていました。

私自身、全てを3Dプリンタで全て完結することに執着しすぎたあまり思考や設計に時間がかかりすぎてしまっていたので、商品例を見せてもらったことでとてもいい刺激になったと思う。

●ご協力先情報



社会福祉法人横浜市リハビリテーション事業団 横浜市総合リハビリテーションセンター（YRS）
<http://www.yokohama-rf.jp>